競技者の転身による困難克服の道筋に関する社会学的考察：
元アメリカ杯挑戦艇クルーを事例として

吉田 毅

**Sociological examination of the way athletes overcome their troubles
by means of transfer: a case study of members of a yacht racing
team trying to qualify for the America's Cup race**

Takeshi Yoshida

Abstract

A study was conducted to identify the most important factors involved in the way that athletes overcome troubles common among athletes. Most previous studies have tended to examine this problem from the viewpoint of the subjective socialization theory. However, this theory has limitations for investigating this issue. We therefore examined this problem using a different approach. We studied the "life histories" of two members of a yacht racing team trying to qualify for the America's Cup race, on the basis of data recorded during interviews. This study focused on how they overcame their troubles by means of transfer. One of the subjects had experienced troubles regarding the limits of his competitive ability as a soccer player when he was a university student, before he became a yacht racer. The other subject had experienced serious occupational troubles after getting a job, due to insufficient preparation for performing the job. Both individuals overcame their troubles by means of transfer. The main findings of this study were that both subjects overcame their troubles by chance. That is, the most important factors determining whether they were able to succeed were based on information regarding transfer obtained by chance from acquaintances, and this information had raised their hopes and prompted them to change their jobs (activities). In other words, this information allowed them to exercise their subjectivity (autonomy) to overcome their troubles. This method of conflict resolution contrasts sharply with the methods reported in previous studies, in which athletes tended to use their subjectivity to overcome their troubles by obtaining emotional support from "significant others" (i.e. family, coaches or teammates). On the other hand, the two study cases were able to use their own subjectivity to overcome their troubles through the aid and support of others. This method of resolution was the same as that reported in previous studies. Our findings suggest that athletes overcome their troubles in various ways, and that help and advice

from other individuals, including family, coaches and even casual acquaintances, can play a very important role in such problem-solving.

Key words : chance, mere others, life history, subjectivity, clinical approach

(Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 51: 125-138, March, 2006)

キーワード：偶然性、何気ない他者、個人史、主体性、臨床的視座

1 はじめに

今日、スポーツはますます高度化、専門化の一途を辿っている。そうした中、多くの者が他に勝ろうとしてスポーツに打ち込むようになっており、競技スポーツ界では競技者間の競争が更に激化している。それゆえ、この世界で競技者として生き残っていくためには、おびただしい時間と肉体的・精神的労力を競技活動に傾注することが必要となっている。もとよりそれ自体が容易ではないだろうが、競技者には競技生活ないしはその後において、種々の困難が不可避といっても過言ではない^{注1)}。

まず、競技生活上の困難としては、競技力の壁（不振）や怪我による競技者生命に直接に関わってくるものが挙げられる。また、組織的スポーツからのドロップアウトの要因として、練習や緊張感、勉強との両立、それに人間関係の軋轢をめぐる困難も報告されている（McPherson et al., 1980；海老原, 1988；青木, 1989）。もちろんこれらの他にも競技生活上の困難はあるが、更に前述した状況では、競技者は競技生活中、競技生活終了後の仕事（活動）のための備えをする余裕がなかったり、なかなかその気にはなれない（あるいは気が回らない）のが現実とも言えよう。そのことに起因する競技生活終了後の仕事上の困難も、競技者が経験する困難として看過できない。

いずれにしても、競技者はその都度困難を克服していかなければ、競技生活あるいはその後の生活を先へ進めていくのに大いに支障をきたすことになる。メンタルヘルスの面で深刻な事態が生じ

ることもあり得る。実際に、競技生活上の困難を克服できず（または克服しようともせず）、道半ばでドロップアウトする競技者は少なくないようである。そればかりか、バーンアウトを経験した競技者や自殺に至った競技者さえいたことも報告されているのである（中込・岸, 1991）。その一方で、前述のように競技生活中の不備により、競技生活終了後に仕事上の困難を経験し、それを克服できず悶々とする者や途方に暮れる者もいる（豊田・中込, 1996）。

これらのことから、競技者の困難克服の道筋（要因連関）について、現実的な様相に基づいて検討することは有意義と言える。従来、この道筋を主題とした社会学的研究はわずかではあるが、主に主体的社会化論という人格形成論の視点から行われている。そこでは、競技生活上の困難を経験した競技者が、情緒的支援者（ないしは情緒的支え）を得たことで主体性を積極的に発揮し、困難を克服しつつ再社会化を遂げていく、言わば理路整然とした道筋が理論的かつ明確に捉えられている（吉田, 1994, 2001）。他方で、近年の人格形成を主題とした社会学的研究から、困難に着目することで人格形成に関する有益な知見が得られることが示唆される（亀山, 1996；多賀, 1996）。この点からも、競技者の困難克服の道筋を主体的社会化論の視点から分析する一定の意義は認められよう^{注2)}。

しかしながら、次節で述べるように、この道筋を主題とした研究における主体的社会化論の枠組みの限界も指摘されている（吉田, 2001）。先行研究の方法論には問題もあるのだ。また、この種の研究は、上記の研究の他にはみられず、まだ緒についたばかりと言わざるを得ない。そこで本稿は、競技者の困難克服の道筋を主題とした社会学

的研究の一環として、この道筋に関する新たな知見を得ることを目的とするが、ここでは主体的社会化論の枠組みに囚われずに考察を行ってみたい。それによつては、方法論の問題に関しても多少とも言及することになるだろう。

なお、本稿では、元アメリカ杯（ヨットの国際大会）挑戦艇クルー2名の個人史（ライフヒストリー）を用い、各々の転身による困難克服の様相に着目する^{注3)}。彼らは、大学期までヨットとは別の種目を専門としており、大学卒業後に一定期間を経てヨットの世界へ転身した。その意味で、ある種目から別の種目、ないしは同じ種目の異なるレベルへの転身（者）を表すスポーツ・トランスファーの範疇に入るとみてよい（Klint and Weiss, 1986）。転身による困難克服のケースは先行研究では取り上げられていないが、人生では当該種目の競技者の道を進むことだけが重要というわけではなく、異なる道へ転身し、転身先で前向きに生きていくことで困難を克服していく仕方もあるだろう。特に競技者の道が絶たれた者の場合は、そのような仕方を選択するより他はない。彼らのうち1名は、大学期に競技力の壁による大きな困難を経験した。もう1名の場合は、この種の困難よりも、前述のような競技生活中の不備に起因する、就職後の仕事上の困難の方が大きかった。両者ともその後、転身を遂げていくことにより困難克服に至ったとみられるが、そうした道筋では、とりわけ転身過程（転身までの過程）が特徴的かつ鍵であったと判断される。そこには非常に対照的な部分と共通の部分があるのだが、各々について比較を交えつつ考察することで有意義な知見が得られるであろう。データの収集は、事例Aには3回に分けて、事例Bには2回に分けて実施されたインタビュー調査による^{注4)}。

II 方法論的背景

前述のように、競技者の困難克服の道筋については従来、主として主体的社会化論の視点から考察されてきた。特に考察の手がかりとされたのは、この枠組みの核とも言える、社会化過程における

主体的行為の概念図式が代表的であった。端的に言えば、これは「コンフリクト、解体、異常、不明確、突発などの言葉によって表現される」という「問題状況」、換言すれば「困難な経験をすする状況」（船津，1983，p. 226）に直面したソーシャライジ（社会化の主体）が、主体性（自律性：内省性や交渉性）を発揮してこの状況に対処していく過程を説明する図式である。むしろ内省性という意味での主体性は問題状況に限らず発揮されているが、この図式がそうした状況に着目するのは、とりわけ主体性が問われるのが問題状況であるからに他ならない^{注5)}。このように、主体的行為の概念図式は、正に競技者の主体的な困難克服過程を理論的に説明するための要件を備えている。因みにエリクソンのアイデンティティ論もこれと論理的に同形であり、アイデンティティの形成・再形成が今日は生涯に亘る課題となっていることを踏まえると、このアイデンティティ論は生涯を射程とする主体的社会化論の枠組みとして有効と言えよう^{注6)}。

しかも、こうした主体的社会化論の枠組みは、次のような意義も有する。スポーツ社会学の社会化論では1980年代半ば以降、社会学的認識論のパラダイム論争等を背景として、ソーシャライジの主体的・能動的側面と社会（規範）的・受動的側面とを相即的に組み入れることが主要な課題の1つとして指摘されるようになった^{注7)}。前述のような主体的行為の概念図式は、個人の主体性について社会（他者）との相互規定的關係を前提として把握する社会学的主体性論、なかでもミード自我論の船津（1983，1989）による解釈の枠組みや、渡辺（1981）が構造機能主義とシンボリック相互作用論各々の役割論の統合を図った際に提示した理論モデル等を基礎に、現実の社会化状況を念頭に置きつつ論理的に展開しないしは具体化されたものである。それゆえ、上記のような社会化論の課題の克服に資するものと考えられる^{注8)}。

特にこうした理由から、競技者の困難克服の道筋について、従来は主体的社会化論の視点から考察されてきた。実際にこの枠組みは、当該事象を理論的に分析する上で一定の有効性をもつことが

認められている^{注9)}。冒頭で述べたように、主体性とその発揮を可能とした情緒的支援者が要因であることを浮き彫りにするのに寄与してきたのである。

しかしながら、こうした方法論には問題もある。まず、この種の研究における主体的社会化論の枠組みの限界が明白と言える。先行研究では、競技者の困難克服の主な要因として心情や気力も見出されているのだが、そもそもこの枠組みは理性的な近代的主体をモデルとしており、感情的側面を捉え得るものではないことが指摘されている（吉田，2001）。主体的社会化論の視点から捉えられるのは、主体性とせいぜいそれに纏わる要因に留まるから、当該事象をこの視点から分析する限り、主体性に馴染まない要因は看過ないしは軽視されてしまう恐れがあるのだ。また、競技者の困難克服の過程において、前述のように内省性は程度の差こそあれ、あらゆるケースで発揮されていると考えるべきである。この意味では結局、いかなるケースでも主体的社会化論の視点からの分析は可能ということになるが、それによって次のような誤解が惹起される可能性もある。即ち、実際には主体性が要因として際立つわけではないケースでも、この視点から分析したならば、言うまでもなく主体性に焦点を当てたステレオタイプの分析がなされ、要因として主体性が過大評価されかねないのである。本稿において、競技者の個人史を主体的社会化論の枠組みに囚われずに分析しようとするのは、概してこうした理由による。ただし、主体性も視野に入れておかねばならないことは論を俟たない。

III 事例の略歴

2名の事例は、1992年にわが国が初めてアメリカ杯に挑戦した際のシンジケート「日本チャレンジ92」のクルー（セイラー）である。冒頭で述べたように、彼らがヨットを始めたのは、大学を卒業して暫くしてからである。大学期までは、事例Aはサッカーを、事例Bはラグビーを専門種目としていた。1987年夏、「日本チャレンジ92」

のクルー募集が開始された。事例Aはその際に応募し、事例Bは約半年後の募集に応募した。両者ともテストに合格した後はキャンプ（合宿）生活に入り、プロセイラーとしてヨットに打ち込んだ。1989年からは世界を転戦し、数々の国際大会で活躍しつつ実戦経験を積んでいった。1992年4月、挑戦艇シリーズ（ルイ・ヴィトン杯）が開幕。彼らは健闘したがそこで敗退し、結局は本戦出場を果たせなかった。とはいえ、それまでのヨット経験を通じて、両者とも過去には味わえなかったほどの充実感や達成感、それにプライドを得た。また、事例Aは「色んな世界の人間と出会い視野が広がった」と、事例Bは「外国からみた日本を感じ取れた」と言うように、各々が貴重な経験ができたと感じている。更に、ヨットの魅力等に関して、事例Aは「水と船底との摩擦音、帆に風が当たる音は何とも言えない」と、事例Bは「基本的に性格の底辺では格闘技はあまり好きでない。ヨットは段取りの種目、神経質な自分の性にあっていた」と別々の角度から語っている。その後、事例Aは、引き続きプロセイラーとして活躍を続けている。事例Bは、跡取りとして家業の工務店を継ぎ、たまに時間が許す範囲でヨットレースに出ている。次に、彼らのヨットの世界に転身するまでの略歴をみていこう^{注10)}。

1. 事例A

事例Aは1963年8月、東北のK市に2人きょうだいの第1子として生まれた（妹1人）。幼少期から大柄で運動能力が高かった。小2の時、親の勧めで剣道少年団に入ったが「防具のつけ外しや寒稽古が鬱陶しかった」ことから、なかなか剣道を好きになれないでいた。小4の時に、ブラジルからサッカーの神様ペレを擁するサントスが来日した。中学校の英語教師である父親がサッカー部の顧問を務めていたこともあり、その試合をテレビでみた。それを契機としてサッカーに関心を持つようになり、剣道を辞めてサッカー少年団に入った。やがて中心的立場で活躍するようになり、サッカーの虜になっていった。とはいえ、環境的にサッカーが盛んだったわけでも指導者に恵まれ

ていたわけでもなく、県大会にすら出場できない弱小チームの「お山の大将」に過ぎなかった。そうした状況は、中学生になってからも暫くの間は変わらなかったが、中2の頃に「プレーの転機」が訪れる。地元でセルジオ越後のサッカー教室が開催され、氏の卓越したプレーを目の当りにしたことで「技術的開眼」があったのだ。更に翌年には、シュートをテーマとした釜本邦茂の講習会有り、そこで強烈なインパクトを受けた。それ以来、シュートを中心とした技術練習に時間を割くようになった。かくして技術に磨きをかけていったことにもより、中3になるとK地区選抜に選ばれ、初めて県大会に出場した。その際によい結果を出せたことで自信と欲が湧き、首都圏にあるサッカーの強豪校への進学を望んだのだが、結局は条件が整わず地元の県立高校に進んだ。

彼の躍進はここから始まった。所属チームは引き続き弱小であったが、彼は1年時に新人戦の地区大会で顕著な活躍をし、2年時には県選抜に選ばれ国体に出場した。補欠で出番は途中からが主だったものの、チームの8強進出に大きく貢献し、大型フォワードとして注目を浴びるようになった。間もなく「青天の霹靂」のごとく日本ユース代表候補に選ばれ、選考合宿に呼ばれるに至った。「最終的に選ばれるわけではないと思った」が、最終選考合宿では捻挫を隠して頑張りを続けた結果、監督から「原石」として評価され、一躍日の丸を背負う選手になったのである。国際大会ではあまり出場する機会はなかったが、悔しさよりも、むしろ代表に選ばれた満足感の方が強かった。また当時、わが国ではまだサッカーにプロの世界がなかったこともあり、進路を選ぶにあたり「サッカーは高校で辞めようか」とも思ったが、受験の準備を始めた頃、強豪S大と新興勢力O大、それに日本リーグのYから誘いを受けた。色々考えた結果、S大への推薦入学を選んだ。

これを機に彼のサッカー人生は暗転。やがて挫折の日々を迎える。部員が百名以上いて、過去と現在を問わず日の丸を背負う者も少なくないS大サッカー部において、彼は入学後、あまり高い評価が得られないばかりか、むしろ「欠点を指摘さ

れることもあった」。やがて活かしてもらえない気がなくなり、練習にも身が入らなくなっていった。2年時に2軍に入ることもあったが、ほとんどは3軍止まりであった。3年の頃からポジションをディフェンスに変えられたが、彼自身そこが自分に適しているとは思えなかった。そんな中で「少しくらいチャンスをくれてもいいじゃないか」と腐り、深酒等の憂さ晴らしに走ることが少なくなかった。ただし、サッカーの道が絶たれたわけではなかったし、それを捨てることなど考えられなかったから、その都度気を取り直して頑張った。だが、不摂生がたたなり、身体が言う事を聞かない状態になっていった。その影響もあって、4年になる頃には練習でアキレス腱を痛めてしまい、1軍への道は遠のいていった。ほとんどサッカーの道が絶たれた状況で卒業の時を迎えた。まだサッカーには未練が残る、その道を完全に諦めたわけではなかったが、「自分の全て」である「サッカー」という初恋の相手に裏切られた」ようで「辛かった」と言う。

大学卒業後は他にやりたいこともなく、大学では体育を専攻していたこともあり、とりあえず大学近辺のアスレティッククラブでインストラクターのアルバイト生活を送ることにした。時折クラブチームでサッカーをする機会もあったが、「挫折感、喪失感」に浸る一方、時間的な面では「解放感」も覚えつつ、バイト後は明け方まで酒場を徘徊する日々が続いた。1人暮らしのアパートで「また朝がきたな」と、もやもやした朝を迎えるのが嫌だったこともある。正に「その日暮しの」日々であったが、大学を出たばかりだったし「それはそれでいい」と思った。お金が底を突いていく中で、バイト先のクラブの会員に奢ってもらったり、ツケで飲むことも少なくなかった。お金のために水商売等のバイトもした。そんな別世界で色んな人と出会うのは楽しく、一時の慰めとなった面もあるが、現実目に移すと「これからが不安だった」。身体が鈍っていくのは特に耐え難かった。次第にそうした生活から抜け出したいと思うようになっていったが、その当てもなかった。バイト先のクラブに、似たような身の上の先輩が

いたことが情緒的な支えにはなった。

大学を卒業して優に1年が過ぎたある夏の日、「酒を奢ってもらうことはあったがそれほど親しかったわけでもない」というバイト先のクラブの会員から、アメリカ杯にわが国から初挑戦する「日本チャレンジ92」のクルーを募集する旨の記事をみせられた。「本当にたまたまだった」が「タイミングがよかった」と言う。当時は、酒に溺れる生活と更なる身体の衰えに危機感すら覚えていたのだ。彼は、募集条件が自分に合ったものだったことで「今の生活から抜け出せるかもと思った」。抜け出すには「ヨットでなくても何でもよかった」が、この時は活力の衰えた心身をヨットが蘇らせてくれる感じがした。早速応募したらテストに合格。前途に光明が見出された。思いもよらず、再び日の丸を背負う身となった。「やるなら今度こそはレギュラーになりたい。試合に出たい」、「二度と後悔したくない」との思いでヨットの世界に足を踏み入れた。

2. 事例B

事例Bは1965年1月、関西のK市に4人きょうだいの第1子として生まれた（妹1人、弟2人）。幼少期から背が高く、性格は温厚で人情的、感受性が強く神経質な面があった。身体は丈夫だったが、特に運動能力が高いわけではなく、周囲で盛んな野球も不得意だった。小4の頃から1年ほどスイミングスクールに通った。小6の終わり頃には、近所の人の勧めでボーイスカウトに入り、それを高1まで続けた。中学では最初、ボーイスカウトの関係からワンダーフォーゲル部に入ったが、初夏には気が変わって水泳部へ、秋には友人の影響を受けてサッカー部へと転部を繰り返した。しかしその後は、担任の先生との約束もあって「練習はきつかった」がサッカーを続けた。

高校は私学へ進みたかったが受験に失敗し、ラグビーの強豪F工高に進んだ。とはいえ、ラグビーがお目当てだったわけでは全くなく、家業が工務店だったからである。入学後はサッカー部に入ろうと考えていたが、著名なラグビー部監督Y先生に大柄だったことで目をつけられ、その気に

なってラグビー部に入部。1年時、チームは初の全国制覇を遂げたが、彼にとっては順調ではなかった。彼は進学希望で、入学当初から塾に通っていた。塾のある日は遅くまで練習があると、片付けもそこそこに先輩より先に帰ることもあった。その旨は監督に理解してもらっていたが、彼は部員の冷たい視線を感じた。それゆえ、監督に退部を申し出たが慰留され、結局はその後も両立は難しく塾を辞めるに至った。2年からはレギュラーとなったが「色々な葛藤」はまだあった。前年より戦力が低下したこともあり、練習はますます激化した。放課後に遊んでいる友人が羨ましくみえ「毎日辞めたいと思った」が、監督が恐く「顔色を窺いながら」続けた。また、辞めたら「脱走兵」のごとく学校にすらいられなくなると感じ、「じっと我慢して」練習に取り組んだ。そんな中で初の全国大会出場。初戦で優勝候補に敗れたが、前夜の部恒例の儀式にもより、この試合は「記憶にないくらい」集中し、ラグビー経験の中で最も頑張れた。3年時は「ここまできたら辞めたら損」と思い、練習に打ち込んだ。全国大会では準決勝まで進出した。3年間頑張り続け、一定の戦績も残せた満足感から「これでラグビーは終わり」と思った。地元の工科系大学を受験したが失敗。専門学校に進むか就職するか考えていた際、東京にある強豪M大への推薦入学の話を受けた。都会で1人暮らしになる不安と親への金銭的迷惑が気になり躊躇したが、母親に勧められ、またM大ラグビー部には高校の先輩もいたので入学を決断した。入学先は、彼の意志に関係なく法学部に決まっていた。

入学後はラグビー部の寮生活が始まった。「寮では1年は奴隷の身分」で「こき使われた」が、そうした状況で「規律を学べたのは良かった」と言う。1年時は雑用に追われる日々であったが、練習では高校の頃とは違った自主性が重視される雰囲気の中、ラグビーの厳しさと同時に楽しさも感じるようになった。2年からは練習に集中できるようになり、自主的にジム通いやメンタルトレーニング等にも努めた。しかし、部員が百名以上いる中で、3年までは1軍半と3軍の間を行き来

する状況が続き、次第に自らの競技力の限界を感じ取っていった。3年時に一度、レギュラーの怪我により大事な公式戦に出場する機会もあったが、最後までレギュラーの壁は厚かった（4年時は17番）。ただし、レギュラーは高校時にオールジャパンやその候補に入った者ばかりだったから、挫折感よりも「ここまでこれで十分」という達成感が強かった。他方、学業の面では特に苦しんだ。もとより自ら志望したわけでもない法学部では、授業についていくことも俚ならず「単位を取得するだけで精一杯だった」。そうした大学生生活の中では、時折ラグビー部の同期生の家で食事をご馳走になることがあり、その母親の存在は「東京の母」のごとく支えになった。

卒業後はラグビーを活かして就職するチャンスもあったが、先輩からそうした場合ラグビーを辞めた後に苦勞すると聞いており、自らの競技力の限界も感じていたことから「どうせ辞めるのなら今辞めて、その分仕事で頑張ろう」と決意した。家に戻るよりも東京に残った方が情報も多く魅力的と思い、関心があった不動産の職種に絞って就職活動をした。大手筋一社は受からなかったが、自ら雑誌で探しあてた一社は受かり、そこに就職した。「なるようになれという感じ」であった。就職後、ラグビーはクラブチームで軽く続けるに留めた。会社の新人研修でアメリカ杯のビデオ鑑賞があり、初めてそれを見た時は感動したが、研修を終えた後の仕事内容は全く性に合わず、期待外れで幻滅した。マンションの訪問販売が主で、ノルマもあったのだ。それを「入社するまで知らなかった」と言う。M大ラグビー部の同期生のほとんどは、ラグビーを活かして一流企業に就職していたこともあり、「こんなはずでは」という「敗北感や挫折感」がここで生じた。会社を辞めようかと思い悩み、友人に相談することもあった。

間もなく、大学在学中に知り合い食事を奢ってもらうことがあった、建設会社の専務をしているM大ラグビー部の先輩に渋谷駅で出くわした。仕事で落ち込んでいることを話したら、氏は親身になって聞いてくれた。この際、転職の紹介もお願いした。それが端緒となり、氏の会社への転職

の話（誘い）を受けた。そこにはM大ラグビー部の同期生も勤めており、氏の会社は訪問販売もノルマもなく安心して働ける会社だということを彼から聞いていた。一気に気が晴れ、「そこでしっかり頑張ろう」と転職を決意。転職先では上司にも恵まれ、建設業に関心をもって充実した日々を送ることができた。そんな中、仕事の取引先である会社の社長と住居が近く、時折酒食を共にした。彼は、氏との出会いがなければヨット界には進んでいなかったと言う。氏はヨットを共同所有しており、彼は2度それに乗せてもらう機会を得、次第にヨットへの関心を強くしていった。更に氏から、近所の居酒屋で一緒に飲んでいる際、アメリカ杯挑戦艇クルー募集の話を目にした。魅力的な話と思い、すぐに募集内容を確認して応募した。テストに合格した後は、今の仕事をとるかヨット界に転身するのかなかなか悩んだ。申し出た休職扱いは会長に却下された。会社には「自分を拾ってくれた」のに迷惑をかけて申し訳ないと思ったが、アメリカ杯への憧れと折角のチャンスを逃したくないという気持ちが勝った。「会社を背負っている気持ち」でヨットの道に進んだ。

IV 考 察

彼らの困難克服の道筋では、冒頭で述べたように、いずれの場合も特に転身過程が鍵であったとみられる。次に、彼らが大学期に当該種目で競技力の壁に直面した後の転身過程について、時間的経過に即して各々の比較を交えつつ考察する。まず、非常に対照的であった、競技力の壁への対応の様相に着目する。続いて、各々がヨットの世界へ転身するまでの様相についてみていきたい。

1. 競技力の壁への対応の様相

彼らは、各々の専門種目で高校期に顕著な活躍をし、スポーツ推薦で大学に進学した後に競技力の壁に直面した。この際の彼らの困難は、性質的には同様であったわけだが、程度的には差があった。むしろ事例Aの困難度の方がずっと大きかったと言える。それは、主として過去の栄光と現

実とのギャップの程度によると思われる。即ち、事例Bは事例Aに比して過去の栄光のレベルは高くなかった。しかも、大学では彼以上の実績を有する兵が少なくない中で、レギュラーの座こそつかめなくとも年を追うごとにそれ相応の評価を受け、4年時には17番のユニホームを手中にしたのである。それゆえ、事例Bの場合は過去の栄光と現実とのギャップはあまりなかった。これに対し、事例Aの場合、大学ではほとんど評価されない状況が続いたから、そうした現実と日本ユース代表に選ばれたという輝かしい過去の実績との間には大きなギャップがあったと言える。

競技力の壁による困難は、競技力の問題が解決できれば、むしろ当該種目の競技者の道を進む形で克服し得るが、解決し難い時には異なる道へ轉身し、そこで前向きに生きていくことで乗り越えるより他はないだろう。彼らは、言うまでもなく後者のケースに当たるが、各々の困難への対応の仕方は非常に対照的であった。即ち、事例Aは挫折し、大学在学中ばかりか卒業後も、長らくそうした状況を引きずった。他方、事例Bは、レギュラーになれないことを自らの競技力の限界と受け止め、ラグビーに見切りをつけて、卒業後は一般的な形で就職するという道を円滑に選ぶことができた。一先ず卒業を区切りとして、最初の轉身（競技者からの轉身）に至ったわけである。こうした過程では、事例Bはもとより事例Aも、先行研究（吉田、1994、2001）で焦点とされている主体性、とりわけ内省性はやはり発揮したとみられる。にも拘らず、競技力の壁による困難への対応の仕方に、このような大きな差異が生じたのは何故であろうか。

それはおそらく、前述のような困難度の差もさることながら、主として当該種目への固執、表現を換えれば当該種目の競技者としてのアイデンティティの問題によるだろう^{注11)}。事例Aの場合、小学4年時に始めたサッカーが、その後に顕著な実績を順調に挙げていく中で、自分の全てとさえ言える熱烈な初恋の相手のごとく切っても切れない絶大な存在となっていく。アイデンティティ形成の手がかりを、専らサッカーの世界に求めた

といっても過言ではない。この状況は、正しく“sport only identification”（Ogilvie and Howe, 1986）との表現が相応しく、大学入学時にはサッカー競技者としてのアイデンティティがかなり強固な状態になっていたとみられる。加えて、エリート色の濃い、ヒーロー性を帯びたアイデンティティ（以下「ヒーロー的アイデンティティ」と略す）も同様である。それゆえ、大学入学後はほとんど評価されないことで度々腐り、挫折したのだが、サッカーを諦めて他の道に進むこと、あるいは進むための備えをすることなど全くといってよいほど考えることはなかったし、大学卒業後はサッカーの道が絶望的になったことで、挫折感、喪失感に苛まれたのである。そうした状況を抜け出したくても、言わばサッカーの代替となり得る恋人候補は容易にはみつからなかった。というよりも、なかなかそれをみつける気にすらなれなかったのだらう。このように、結局は競技力が伴わなかった彼の場合、強固なサッカー競技者としてのアイデンティティが、主体性を発揮して次なる道に進む上で大きな足枷になったと考えられる。

これに対し、事例Bにおいては、強豪チームの一員としての競技歴を通じてラグビー競技者としてのアイデンティティおよびヒーロー的アイデンティティが形成されはしたものの、いずれも事例Aほど強固な状態にはならなかったとみられる。彼の場合、ラグビーを始めたのは高校入学後であり、ラグビー経験はそれほど長くはない。しかも、高校時にラグビーを続けたのは、それへの固執によるのではなく、恐くて厳しいY先生との関係と、言わば辞めるに辞められない状況による面が大きかった。続けたことで一定の戦績を残したが、本心ではラグビーから距離をおいていた感是否めない。また、高校卒業後の進路として、自らラグビーの道を志望したわけでもなかった。M大ラグビー部では、高校時とは対照的な自主性が重視される練習環境の中で、漸くラグビーの楽しさを感じるようになり、多くの兵の中で17番のユニホームを手中にしたものの、やはり卒業後の進路選択にあたりラグビーに固執することはなかった。そもそも彼は、高校以前のスポーツ歴をみて

も、1つの事柄に飽くなき拘りをもつようなタイプではないと思われる。更に、性格的に格闘技があまり好きではないとの彼自身の言も踏まえると、事例Bにとってはラグビーが切っても切れない仲のごとき存在であったとは言えまい。

このように、競技力の壁による困難への対応の仕方に差異が生じたのは、主に当該種目の競技者としてのアイデンティティの問題によると考えられる。そのことと先行研究（吉田，2001）の知見を鑑みると、競技者が競技生活上の困難を主体性を発揮して克服するにあたり、強固な当該種目の競技者としてのアイデンティティは正しく両刃の剣と言える。即ち、当該種目の競技者の道を進む形で困難を克服しようとする場合は1つの礎（活力）となり得るが、その道が絶望的で他の道への転身という形でしか困難を克服し得ない場合は足枷になる恐れがある。

2. ヨット界への転身までの様相

ここで注意すべきは、事例Bがむしろ就職した後にずっと大きな困難を経験したことである。彼は正しく、冒頭で述べた競技生活終了後の仕事上の困難を経験するに至った。昨今は、競技者の現役引退に関する研究がわが国でも活発化している（海老原，1993；豊田・中込，1996，2000；山本ほか，1999；吉田，1999）。この種の研究は、主として競技者の現役引退後のセカンドキャリアの問題に着目しているのだが、事例Bが就職後に経験した困難も文脈的にこの問題に通じており、競技生活を離れてからの出来事とはいえ、競技者の問題として取り上げるべきものと言える。即ち、いずれの事象にも、競技生活終了後へ向けた、競技生活中の不備の問題が本質的に底流しているのである。

事例Bは就職後、仕事の内容が全く性に合わず挫折したわけだが、それを入社するまで知らなかったことから、この際の挫折の原因は、就職後ではなく就職先を決める段階以前、即ち競技生活中にあったことは明白である。端的に言えば、就職をめぐる主体性の発揮の仕方に問題があったのだ。彼の場合、大学では情緒的支援者を得てラグ

ビーに打ち込む一方、学業面では自ら志望したわけでもない法学部で専ら単位取得に追われるなど、全般的にみて卒業後にラグビーとは異なる道へ進むための備えが不足していたことは否めない。就職活動も成行き任せであり、就職先に関する情報の収集はあまりにも不十分であったと言わざるを得ない。要するに、就職へ向けて主体性を適切に発揮することができず、結果として全く適性に合わない職に就く羽目に陥ったのであり、事例Aとは別の意味で、この段階まで主体性によって競技力の壁による困難を克服することはできなかった。それどころか、ずっと大きな困難を経験するに至ったのである。転身という形での困難克服に資する主体性を発揮するには、転身先に関する情報を確と得、自らの適性を踏まえて適切に転身先を選択することが肝心と言うより他はないだろう。

さて、ここで事例Bを救ったのは特に主体性の類ではなかった。彼自身の意志（理性）によるわけでもない、大学ラグビー部の先輩との偶然の出会いに他ならなかった。事例Bは、それによって氏から転職の情報（救済の情報）を得、氏の会社への転職という2度目の転身に至ったのだ。その後は、充実感を覚えつつ前向きに仕事に取り組むことができたから、この時点で前述のような一連の困難をほぼ克服し得たとみてよいだろう。やがて、彼はヨット界へ転身し、飛躍していったわけだが、この過程も偶然性の色合いが濃い。クルー募集の情報は、転職先の仕事を通じて知り合った後、わずか数カ月の付き合いがあっただけの取引先の会社の社長からたまたま得られたのであった。一方、事例Aのヨット界への転身過程で際立つのも偶然の出来事と言える。彼にとって起死回生となったクルー募集の情報は、それほど親しかったわけでもないというバイト先のクラブの会員から、やはりたまたま得られたに過ぎない。彼らを転身へと導いた情報はこのように、いずれも単なる知人、言わば何気ない他者から偶然に得られたものである。それゆえ、彼らの転身による困難克服の道筋は偶然性を抜きにして語ることはできない^{注12)}。しかしながら、彼らがそのような情

報ばかりにとびつき、転身の決意をはじめとする困難克服に資する主体性を発揮するに至ったのは何故であろうか。

その主たる要因として、彼らのプライドの問題が挙げられる。彼らには前述のように、大なり小なりヒーロー的アイデンティティが形成されていたが、それとプライドとは均衡的關係にあると見做してよいだろう。彼らは情報を得る頃、プライドをめぐる切実な問題に直面していたのだが、いずれの情報も各々に、その時点でのプライドを保ち得る（この問題を解決し得る）仕事（活動）への転身が可能であるとの予感（期待）を抱かせるものであった。そうした予感が、転身して心機一転やり直そうといった彼らの決意を引き出す原動力になったと解釈される。各々のケースについては概ね次のようである。

事例Aの場合、大学入学後、エリート色の濃いヒーロー的アイデンティティ、換言すれば高きプライドを満たせずに（傷つけられて）挫折したとも言える。この状況は長期に及んだから、ヒーロー的アイデンティティは動揺しつつ弱化し、プライドもそれ相応に低下していったとみられる^{注13)}。大学卒業後は、むしろサッカー競技者としてのアイデンティティを満たせなくなり挫折状況を引きずった。酒に溺れる生活が続き、身体は徐々に鈍っていった。かつて競技者として日の丸を背負う域にまで上り詰めた彼にとって、特に若くして身体が衰えていくことは切実であり、プライドが許さなかったと推察される。プライドを低めるにも限度があったのだ。しかし彼は、惰性的となった生活を改めることはできず、やがて身体の衰えがプライドを保てなくなりそうなレベルに達し、危機感すら覚えるようになった。丁度その頃にクルー募集の情報を得たのである。この情報は、彼自身が言うようにタイミングがよかった。それゆえ彼に、再び競技の世界に身をおくことで生活を一変させられるのでは、心身の活力を取り戻せるのではといった予感を抱かせ、転身を決意させるものとなり得たのである。それではこの時、サッカー競技者としてのアイデンティティはどのようであったのか。彼においては大学卒業後、サ

ッカーの道が絶望的となり、しかも生活上の不安が高じていくに伴い、サッカーばかりに拘っている余裕などなくなっていった。そして、危機感すら覚える状況では、サッカー競技者としてのアイデンティティはほとんど影をひそめ、転身の足枷とはならない状態になっていたと考えられる。

一方、事例Bは就職後、仕事の内容に幻滅し、M大ラグビー部の同期生の中で一人取り残された感覚に苛まれた。彼なりのヒーロー的アイデンティティに見合ったプライドを傷つけられて挫折したとみられる。彼の場合、プライドがそれほど高かったわけではないが、それでも性に合わない訪問販売とノルマに追われる自分の姿を許容することはできなかった。それで退社したいと思い悩み、言わば藁にもすがるとき心境となった頃に、先輩から氏の会社への転職の情報（救済の情報）を得たのである。彼は、前述のようにこの会社の様子を知ること、そこなら不満を覚えることなく働けるのではないかとこの予感を抱き、転職を決意したのであろう。更に、クルー募集の情報は、彼がアメリカ杯をビデオでみて感動した後、ヨットへの関心を強くしていた時に得た。いずれの情報も偶然に得たとはいえ、彼の心境にはまるものであったと言える。なお、彼の場合は、転職先の仕事でもプライドを保ち得たが、クルー募集の情報は、言わばより高きプライドを獲得し得る仕事（活動）への転身が可能であると、彼に予感させるものであったと言えよう。

このように、偶然に得た情報でも、彼らにとってはそれが、プライドをめぐる切実な問題の解決に直結するとの予感がしたからこそ、とびつくに値するものになったと解釈される。実際に、彼らは転身後、決意が揺らぐことなく仕事（活動）に取り組み、転身を成就させると同時にプライドの問題を解決することができた。即ち困難克服に至ったのだが、転身に当たっての彼らの決意が強固であったからこそ、転身後はさして問題は生じなかったのであろう。この意味で、彼らの困難克服の道筋では転身過程、特に転身の決意を固めるまでが鍵であったと判断される。

なお、彼らの場合、結果的にはヨット界で活躍

することにより困難克服を決定づけたが、挫折状況を抜け出すにはヨットでなくても何でもよかったとの事例A自身の言や、事例Bがヨット界に転身する前の職場では困難を克服し得たとみられることから、各々にとって困難克服のための転身先は、必ずしもヨット界である必要はなかったと言えよう。前述のように、挫折した彼らにとって緊要だったのは、とにかくプライドの問題を解決し得ると予測される仕事（活動）に転身することであったと考えられる。

ところで、先行研究では前述のように、主体性とその発揮を可能とした情緒的支援者の存在が主たる要因として報告されていた。そして、そうした他者は恩師やコーチ、ないしは配偶者やチームメイトであり、いずれも各々の競技者にとって「主として心理的な意味において高い重要性を付与された他者」である「重要な他者」（後藤，1994）の類であった。この種の他者が情緒的支援者になるとともに困難克服に寄与するという道筋は、必然性を帯びており、冒頭で述べたように理路整然としている。その意味で、本稿で見出された偶然性の色合いが濃い困難克服の道筋は、先行研究の知見とは対照的なものと言える。何気ない他者が偶然に困難克服に寄与することもあり得るのだ^{注14)}。その一方、各々の知見には共通する面もある。即ち、本稿の事例は両者とも、偏に自力で困難克服に資する主体性を発揮することはできなかったわけだが、先行研究の知見もこの点はほぼ同様であった（吉田，1994，2001）。このことから、競技者の困難克服の道筋では、現実的に他者の働きが重要であることが示唆される。

V ま と め

本稿では、競技者の困難克服の道筋に関する新たな知見を得ることを目的とした。それにあたり、先行研究で基本的視点とされているものの、この種の研究では限界も有する主体的社会化論の枠組みに囚われずに、元アメリカ杯挑戦艇クルー2名の転身による困難克服の様相をめぐって考察を加えた。本稿で得られた知見は、前述のような特徴

を有する事例から見出された限定的なものと言わざるを得ない。競技者の困難克服の道筋に関して一般化し得る知見を得るには、更に種々の事例を対象として検討を重ねていくことが必要であるが、ここでは主に次のような新たな競技者の困難克服の道筋が浮き彫りにされた。

彼らの転身による困難克服の道筋は偶然性の色合いが濃く、先行研究で捉えられた必然的で理路整然としたそれとは対照的であった。この道筋で鍵となった転身過程では、何気ない他者（単なる知人）から偶然に得た情報が際立っていた。彼らはそれにより、転身の決意をはじめとする困難克服に資する主体性を発揮し得た。彼らがこうした情報にとびついたのは主として、いずれの情報も各々に、情報を得た時点でのプライドを保ち得る（プライドの問題を解決し得る）仕事（活動）への転身が可能であるとの予感（期待）を抱かせるものであったことによると解釈された。その意味では、転身先は必ずしもヨット界である必要はなかったとも言えよう。ところで彼らは、偏に自力によってではなく、多分に他者の力を得たことで困難克服に資する主体性を発揮し得たが、この点は先行研究の知見と他者の性質は違えどもほぼ共通していた。これらから、競技者の困難克服の道筋は一括りにはできないこと、また、いずれにしてもこの道筋では、現実的に他者の働きが重要であることが示唆される。

なお、本稿では、競技者が困難を克服しようとする際の主体性に関する新たな知見も得られた。そのことから、競技者が転身という形での困難克服に資する主体性を発揮するには、転身先に関する情報を確と得、自らの適性を踏まえて適切に進路を選択することが肝心であると言及できる。また、先行研究の知見も踏まえると、競技者が主体性を発揮して競技生活上の困難を克服していくにあたり、強固な当該種目の競技者としてのアイデンティティは、当該種目の競技者の道を進もうとする場合は礎（活力）となり得る反面、転身という形を取らざるを得ない場合は足枷になる恐れがあるということが指摘される。

最後に、この種の研究の方法論について触れて

みたい。臨床的視座から新たな人間形成論を構想する田中（2003）は、臨床的（実践的）に教育の現実に出会うと、既存の理論的枠組みでは捉えられない側面が色々とみえてくることを示している。こうした氏の議論は、本稿に対しても示唆的である。前述のように、そもそも主体的社会化論の枠組みは、個人の主体性たる理性による営みを説明するものであり、心情や気力を捉えることができない。また、本稿で見出された偶然性も理性によって操作できる類ではなく、この枠組みに馴染まないことは言うまでもない。臨床的にスポーツの現場に接しつつ競技者の困難克服の道筋を探っていけば、これらのような、主体的社会化論の枠組みでは捉えられない要因が更に見出されることが予測される。それゆえ、この種の研究の方法論としては、臨床的視座からデータの収集に努めつつ、分析においては主体的社会化論の枠組みはせいぜい1つの手がかりとするに留め、その枠外の要因にも留意することが有益と言えよう。

注

注1) ここで言う困難とは、苦労や悩み（苦悩）と同義である。

注2) 心理学の分野では、1960年代頃からエリクソンのアイデンティティ論を援用したりそれを背景とする研究が蓄積されてきた（鑑ほか編，1984，1995）。周知のように、この理論は、アイデンティティ形成と危機とを密接な関係として捉えるものである（エリクソン，1973）。それにもよるだろうが、上記の研究の中では、アイデンティティ形成について検討する上で危機に着目するものは少なくないようである。しかも、近年でもこの種の研究は跡を絶たない（中込，1993；岡本，1994）。このことから、危機や困難に着目して人格形成の問題を探究していく意義が示唆される。

注3) 個人史（ライフヒストリー）法の意義については吉田（2001）が端的に述べているが、その詳細については谷（1996）を参照されたい。

注4) 個人史（ライフヒストリー）は「口述史，自伝，伝記，日記など」によって作られる。本稿で用いるライフヒストリーは基本的に、近年におい

てメジャーになっているという口述史に基づく（谷，1996）。この場合は「インタビューで語られた話をライフヒストリーへ構成する」作業が必要となるが、そうしたプロセスを通じて作られたライフヒストリーは、そもそも「語り手と聞き手の二つの主体」による「二重の解釈」を経た「作品」という性質をもつ（小林，1995）。ただし本稿では、語られた話をできる限り正確に解釈したいとの思いから、ライフヒストリーをほぼ作り終えた段階で、解釈にずれがないかを2名の語り手に郵送や電子メールによって確認した。インタビュー調査は、事例Aに対しては2003年4月と8月に、事例Bに対しては2003年12月に実施した。

注5) この枠組みの詳細については吉田（1992）を参照されたい。

注6) 主体的社会化論の枠組みとしてのアイデンティティ論については吉田（2001）を参照されたい。

注7) こうした課題の詳細については、岡田・山本（1984），山口・池田（1987），それに吉田（1990）を参照されたい。

注8) この理論的枠組みの系譜については吉田（2001）を参照されたい。

注9) 主体的行為の概念図式は、バーンアウトを経験した競技者がそれを克服していく過程の分析（吉田，1994）において、アイデンティティ論の枠組みは、元プロサッカー競技者ラモスが来日後に経験した一連の困難を克服していく過程の分析（吉田，2001）において手がかりとされ有効性が認められている。

注10) 略歴を提示するにあたり、2名の事例からは実名（氏名，出身校等）を表記してよいと言われている。しかしながら、実名には関心がない読者に対し、ことさらそれを知らせる必要はないし、また、実名を表記した場合の読者へのインパクトを想定し、ここではあえてアルファベット表記（匿名）とした。

注11) ここで言うアイデンティティは、周知のような、エリクソン（1974）による「個人の中核、さらにまた、彼の共同体文化の中核に『位置する』一つのはたらきであって、まさにこれら二つの同一性の一致を確立するはたらき」という自我同一性を意味する。なお、この解釈については西平（1993）を参照されたい。

注12) 偶然とは一般に、個人の意志（理性）とは関係なく思いがけないことが起こることを意味するが、本稿で言う偶然（性）もこうした一般的な意味として理解されたい。

注13) アイデンティティとは「＜プロセス＞であり＜運動＞」（西平，1993，p. 215）である。また「主観的現実には常にある特定の妥当性構造（plausibility structure），つまりそれを維持するのに必要とされる特定の社会的基礎と社会的過程とを拠り所としている」（バーガー・ルックマン，1977）。即ち、アイデンティティは、それを確認できる状況がなければ維持し難い動態的なものであり、個人が置かれた状況により時間的経過に伴い変容し得るものと捉えられる。

注14) 後述のように臨床的視座から新たな人間形成論を構想する田中（2003，p. 247）によれば「人生は、何時どんな出来事に出会い何時果てるとも知れない偶然性に彩られている」。だからこそ、本稿の事例から見出されたような偶然性の色合いが濃い困難克服の道筋もあるのだろう。彼らの場合、言わば救いの手となる転身の情報は誰から得られてもよかったが、前述のようにたまたま一人の何気ない他者から得られたのである。

文 献

- 青木邦男（1989）高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因。体育学研究，34：89-100。
- バーガー・ルックマン：山口節郎訳（1977）日常世界の構成。新曜社：東京，p. 260。＜Berger, P.L. and Luckmann, T. (1966) The social construction of reality. Doubleday and Company: New York.＞
- 海老原修（1988）組織的スポーツからのドロップアウトに関する研究。体育・スポーツ社会学研究，7：107-129。
- 海老原修（1993）トップアスリートの光と影。体育科教育，41（1）：28-31。
- エリクソン：小此木啓吾訳編（1973）自我同一性。誠信書房：東京。＜Erikson, E.H. (1959) Identity and the life cycle. International University Press: New York.＞
- エリクソン：星野美賀子訳（1974）ガンディーの真理2。みすず書房：東京，p. 56。＜Erikson, E.H. (1969) Gandhi's truth. W.W. Norton and Company: New York.＞
- 船津 衛（1983）自我の社会理論。恒星社厚生閣：東京。
- 船津 衛（1989）ミード自我論の研究。恒星社厚生閣：東京。
- 後藤将之（1994）意味ある他者。見田宗介ほか編〔縮刷版〕社会学事典。弘文堂：東京，p. 58。
- 亀山佳明（1996）個人主義の困難と自我変容—夏目漱石『それから』を中心に—。井上 俊ほか編文学と芸術の社会学。岩波書店：東京，pp. 55-77。
- Klint, K.A. and Weiss, M.R. (1986) Dropping in and dropping out: participation motives of current and former youth gymnasts. Can J Appli Sport Sci, 11 (2): 106-114.
- 小林多寿子（1995）インタビューからライフヒストリーへ。中野 卓・桜井 厚編 ライフヒストリーの社会学。弘文堂：東京，pp. 43-70。
- McPherson, B., Marteniuk, R., Tihanyi, J., and Clark, W. (1980) The social system of age group swimming: the perceptions of swimmers, parents, and coaches. Can J Appli Sport Sci, 5 (3): 142-145.
- 中込四郎・岸 順治（1991）運動選手のバーンアウト発症機序に関する事例研究。体育学研究，35：313-323。
- 中込四郎（1993）危機と人格形成—スポーツ競技者の同一性形成—。道和書院：東京。
- 西平 直（1993）エリクソンの人間学。東京大学出版会：東京。
- Ogilvie, B.C. and Howe, M. (1986) The trauma of termination from athletics. In: Williams, J.M. (Ed.) Applied Sport Psychology. Mayfield: California, pp. 365-382.
- 岡田 猛・山本教人（1984）スポーツと社会化論についての一考察—Social AgentとSocializeeの相互作用の観点から—。体育・スポーツ社会学研究，3：79-95。
- 岡本祐子（1994）成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究。風間書房：東京。
- 多賀 太（1996）青年期の男性性形成に関する一考察—アイデンティティ危機を体験した大学生の事例から—。教育社会学研究，58：47-64。
- 田中毎実（2003）臨床的人間形成論へ—ライフサイクルと相互形成—。勁草書房：東京。
- 谷 富夫（1996）ライフ・ヒストリーとは何か。谷富夫編 ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために。世

- 界思想者：京都，pp. 3-28.
- 鏑幹八郎・山本 力・岡本祐子編（1984）アイデンティティ研究の展望I. ナカニシヤ出版：京都.
- 鏑幹八郎・宮下一博・岡本祐子編（1995）アイデンティティ研究の展望II. ナカニシヤ出版：京都.
- 豊田則成・中込四郎（1996）運動選手の競技引退に関する研究：自我同一性の再体制化をめぐって. 体育学研究, 41：191-205.
- 豊田則成・中込四郎（2000）競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化の検討. 体育学研究, 45：315-332.
- 渡辺秀樹（1981）個人・役割・社会—役割概念の統合をめざして—. 思想, 686：98-121.
- 山口泰雄・池田 勝（1987）スポーツの社会化. 体育の科学, 37：142-148.
- 山本教人・吉田 毅・多々納秀雄（1999）スポーツ選手のリタイアメントに関する社会学的研究—調査結果の検討—. 健康科学, 21：77-91.
- 吉田 毅（1990）スポーツの社会化における「主体的—受身的論争」の検討—主体的自我論を基底として—. 体育・スポーツ社会学研究, 9：103-122.
- 吉田 毅（1992）スポーツ社会学における社会化論への一視角：主体性をめぐって. 体育学研究, 37：255-267.
- 吉田 毅（1994）スポーツ的社会化論からみたバーンアウト競技者の変容過程. スポーツ社会学研究, 2：67-79.
- 吉田 毅（1999）スポーツ選手の現役引退に関する社会学的研究の視点. 九州体育・スポーツ学研究, 13（1）：75-84.
- 吉田 毅（2001）競技者の困難克服の道筋に関する社会学的考察：主体的社会化論を手がかりに. 体育学研究, 46：241-255.

（平成16年 7 月23日受付）
（平成17年 9 月 3 日受理）